研究紀要　第9号　279－292頁　2001年3月
財とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

平安時代兜鉢の一例

津野（つの）　仁（じん）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　北海道大学農学部博物館蔵兜鉢出土経緯
Ⅲ　北海道大学農学部博物館蔵兜鉢説明
Ⅳ　奈良・平安時代兜鉢変遷試案
Ⅴ　おわりに

平安時代の甲冑は遺存例が少なく、特に、平安前期に遡ると言われるものは極めて限られる。今回、平安時代の所産とみられる北海道大学農学部博物館蔵の兜鉢を報告する。

次に、小札の編年によって年代的位置付けが可能になってきた奈良・平安時代の兜鉢について、わずかな資料であるが、様式的観点から変遷と年代観の付与を試案として述べ、初期大鎧の星兜鉢に成立期の問題の一端についてふれる。

Ⅰ　はじめに

平安時代の甲冑は、大鎧として造形美に優れたものであるが、遺存品は少なく、今回報告する北海道大学農学部博物館蔵品を含め14例程を数えるに過ぎない。当該期の兜鉢は、一般に星兜と呼称され、厳島神社蔵小桜威大鎧などを除けば、矧板鋲留式の構造が多いが、その成立時期や成立過程の実態は未だ十分な解明がなされていないのが実状である。特に、一般に平安後期の所産と言われるものは、このうち３分の２程を占め、平安前期のものとなると極めて少ない。そこで、平安時代の甲冑研究の資料増加を図るべく、その報告を行い、併せて奈良時代から平安時代前期・中期の兜の年代的位置付けを試みてみたい。

なお、調査と発表について快諾を頂いた北海道大学農学部博物館には御礼を申し上げます。

Ⅱ　北海道大学農学部博物館蔵兜鉢出土経緯

この兜鉢の出土地及び出土経緯については２説が存在する。その経緯について年次を追って記述してゆく。なお、この兜鉢は同博物館蔵の蕨手刀と伴出したという説もあって、兜鉢・蕨手刀ともに調査を行なった。型式変化の把握されている蕨手刀との共伴が事実であれば、兜鉢の年代付与の定点になるからである。

① 河野常吉　1914「蝦夷の刀剣」『考古学雑誌』第４巻第５号

北大博物館蔵と判断される蕨手刀を明治44年６月網走村メマンベツ網走湖畔で鉄道工事中、地下15尺のところで掘り出したという。

② 高橋　勇　1929「アイヌの鏃先に就て」『考古学雑誌』第19巻第８号

明治20年（1887）７月14日、札幌市北２条西１丁目札幌農学校地内より同博物館蔵の兜鉢を発見したという。共に出た遺物は鏃先１・太刀５・木製の矢尻３という。

③ 後藤守一　1928『考古学講座　原始時代の武器と武装』（国史講習会編）

北大博物館蔵蕨手刀の解説のなかで、蕨手刀と兜鉢が網走村で地下５ｍ程のところから伴出したという、と記述している。さらに、同博物館蔵の蕨手刀の実測図を公表した。

④ 北海道帝國大学付属博物館・札幌市厚川会　1932『第１回　北海道先史時代遺物展覧会陳列品目録（蝦夷往来第６号特輯号）』

同博物館蔵の兜鉢は、札幌市北１条西８丁目の新道開鑿の際出土したと解説している。共に出た遺物は、鉄刀４・鏃先１であり、蕨手刀は網走村女滑嘉湖畔出土としている。

⑤ 後藤壽一　1937「札幌市及其附近の遺跡・遺物の二三に就て」『考古学雑誌』第27巻第９号

北大博物館蔵の刀と甲冑について、明治22年札幌市北１条西８丁目から出土したと記述している。

⑥ 伊東信雄　1938「北見出土の蕨手刀に就いて」『考古学雑誌』第28巻第７号

北大博物館蔵の蕨手刀と兜鉢が一緒に発見されたという後藤守一氏の見解を引用する。

⑦ 大場磐雄　1947「蕨手刀に就いて」『考古学雑誌』第34巻第10号

蕨手刀発見地名表のなかで網走町出土の蕨手刀について兜と伴出したと、河野氏・後藤守一氏の文献を引用し記述している。

⑧ 河野広道　1958「蕨手大刀」『網走市史』（『続々北方文化論　河野広道著作集Ⅲ』1972〔北海道出版企画センター発行〕に所収）※市史の記述は1948年～1954年

網走付近の蕨手刀を解説するなかで、北大博物館蔵の蕨手刀について明治42年美幌部落ビスマトマナイで発掘されたと記述している。後藤守一氏の『考古学講座　原始時代の武器と武装』を引用し、北大博物館蔵兜鉢の年代から蕨手刀について藤原時代の所産とみなしている。

⑨ 石井昌國　1966『蕨手刀』雄山閣

後藤守一氏の見解を引用し、蕨手刀と伴出したという藤原鉢として北大博物館蔵兜鉢の写真を掲載している。

⑩ 宇田川　洋編　1984『河野広道ノート　考古篇５』北海道出版企画センター

北大博物館蔵兜鉢は、1933年発行の雑誌『ドルメン』とノートを基に、札幌市南１条出土と記述している。さらに、この兜鉢と共に鏃先・刀剣が出土したと述べている。

このように、北大博物館蔵兜鉢をめぐっては、後藤守一氏による網走湖畔において蕨手刀と共に出土したと言う説が1928年に出されてから、これを引用する伊東1938論考・大場1947論考・河野1958論考・石井1966論考があり、一方で札幌市内において出土位置と出土時期に若干の相違があるものの、高橋　勇氏が報告したように1929年に鍬先（鍬形）と太刀と共に出土したという説がある。高橋説に近い説は、北海道帝國大学付属博物館・札幌市犀川会　1932・後藤壽一1937や河野広道ノートで示されている。両説の傾向をみると網走湖畔出土説では、在京など北海道以外在住の研究者が蕨手刀を研究してゆく過程で継承されていった説であり、札幌市内出土説では、北海道大学付属博物館や河野広道氏などの北海道在住の機関・研究者で展開し、出土位置・出土時期の指摘に相違があるが、鍬先（鍬形）と太刀が共に出土したという点は、いずれも共通している。見解をクロスデーティングする立場に立てば、在京の後藤守一氏から始まる説よりも、北海道在住の複数の研究者による説で、共に出た遺物も近似していることから、札幌市内出土説の方の蓋然性が高いと思われる。

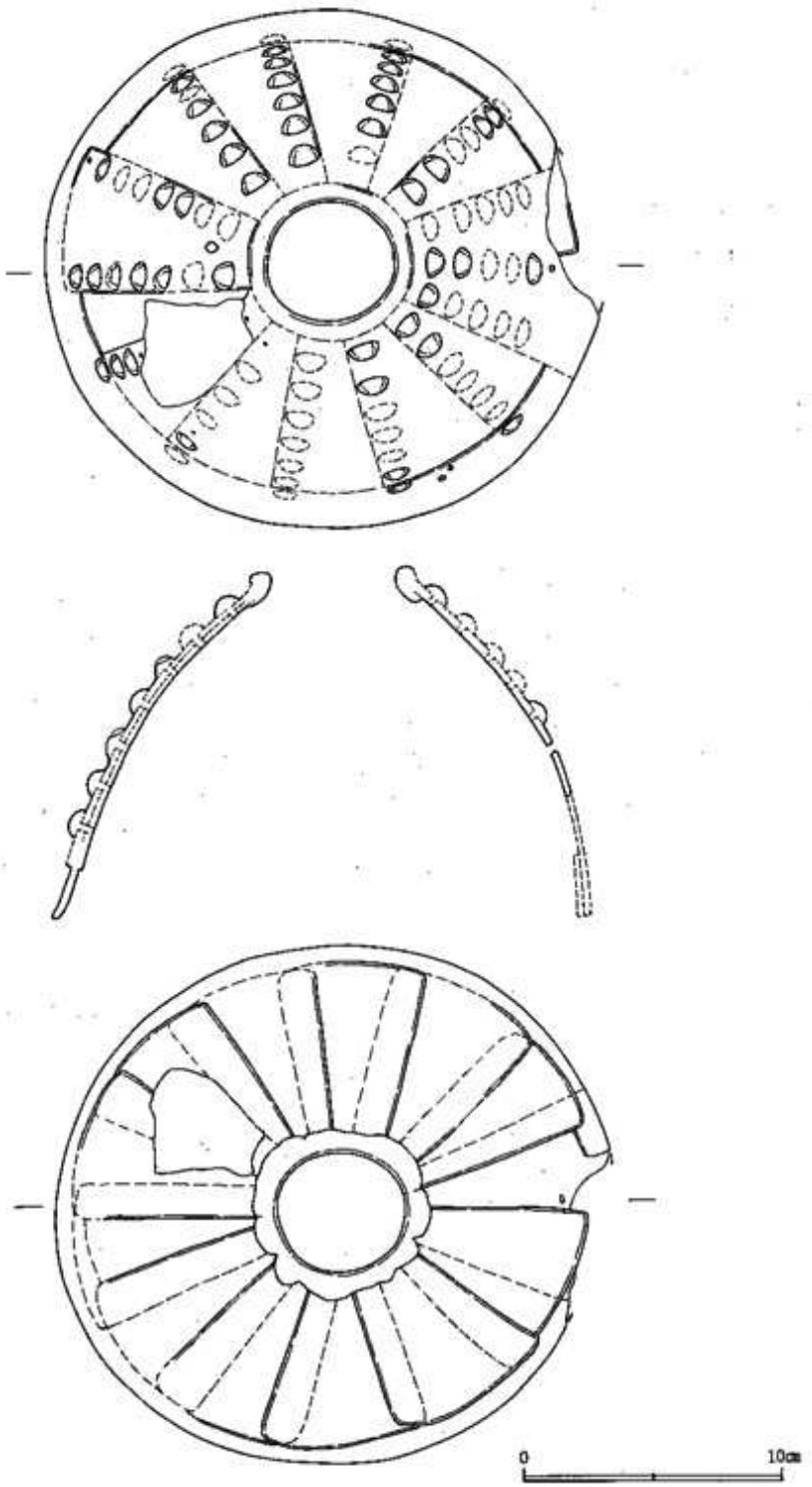
Ⅲ　北海道大学農学部博物館蔵兜鉢の説明

兜鉢には、表面全面に土砂が厚く付着しており、裏面では錆の噴出しが顕著に認められた。このため、響穴・鞠を鉢に取り付ける穴は確認できなかった。なお、実測図では破線は土砂などで明確には観察されなかった部分を示し、実線は観察された部分を表す。

鉢は前後径21.5cm、左右径20.2cm、高さ13.5cmを測る。矧ぎ板の構造は、土砂が付着しているが、現在確認できるのは13枚張りで、馬手側は後正中板の隣の板金を張出板としたとみられ、両側とも下重ねになっている。射向側は前正中板から２枚目が両側とも下重ねになっており、この板金が張出板とみられる。矧ぎ板枚数は馬手側６枚、射向側5枚である。それぞれの矧ぎ板は、腰巻側での幅で56～68mmであって、60mm前後が主体的である。馬手側の前正中板隣の板はほかの矧ぎ板と比較して幅が狭く44mm程を測るに過ぎないことから、矧ぎ足したものとも考えられる。このため、本来は12枚矧ぎの構造であったとも想定される。しかし、両側面張り出しで、後張り出し前張り止めの２方式であって、14枚張りの定式化への方向性も伺える。このため、本来14枚矧ぎを意図していた可能性もある。なお、馬手側後部と前正中板下端は欠損している。

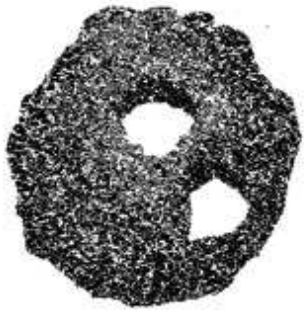
板金の縁は平らのままで、筋を立てない。

星は表面の剥離した部分に金属鉄が観察されることから、無垢星である。板金に一行に６個、腰巻に１個を打っている。八幡座の周囲には土砂が付着するが、星状の高まりは観察されなかった。また、地板の最上段の星と玉縁との間隔が７mm程で、星の打たれる幅はない。星の直径は11mm程、高さ４mmであって、径に比べて高さが低いが、表面に土砂が付着した状態での計



第1図　北海道大学農学部博物館蔵鉢実測図

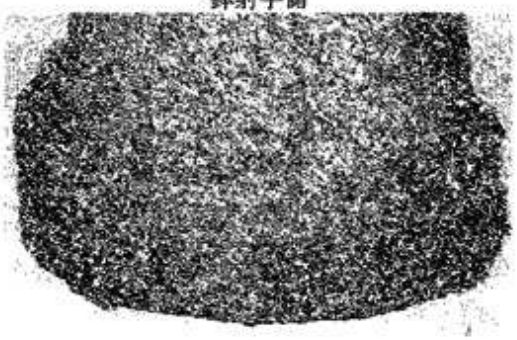
鉢前正中



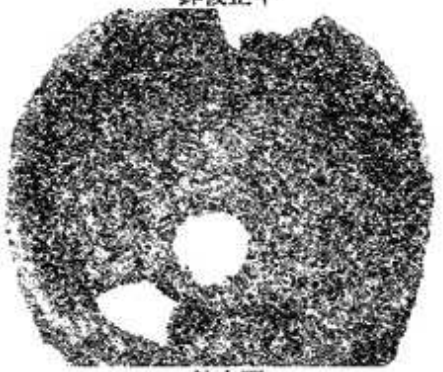
鉢上から

鉢射手側

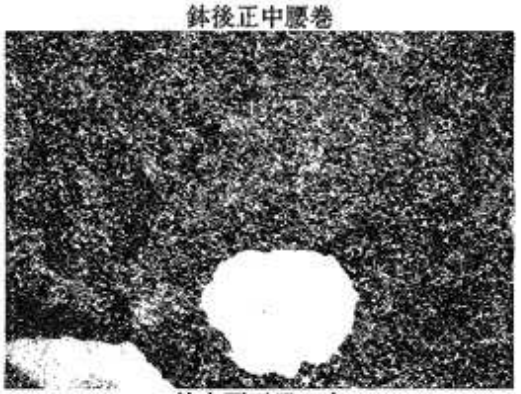
鉢後正中



鉢後正中腰巻



鉢内面



鉢内面天辺の穴

鉢内面前正中

第２図　北海道大学農学部博物館蔵鉢

測のため、本来より低い計測になっている可能性がある。行数は、前正中板に3行、後正中板に2行、そのほかの板金に9行打っていたと判断され、合計14行である。

後正中板に打たれた射向側の星の行では、星が馬手側の星の行と横に平行に並ばず、8個の星があったと判断され、不定形な打ち方となっている。なお、内面の星の根を留めた跡はいずれも不明瞭である。

八幡座は、土砂の付着する状態からみて鉄製（共鉄）と判断される。小刻座・裏菊座は確認できないが、後正中板と馬手側の接する板金上端のところに葵葉状の鉄板のカーブが土砂の間にみられたが、葵葉座であるかは不確定である。鐶状の円座は高さ3㎜程の玉縁となっており、断面蒲鉾状を呈している。玉縁の幅は下端において7㎜で、頂辺の穴は内径で48～49㎜である。

前正中板には、篠垂は確認できず、中心の行に6個の星、左右に5個と判断される星を打っている。

笠印付鐶は現状では土砂が厚く付いており確認できないが、後正中板に玉縁上端から25㎜程の位置において、4㎜四方の鉄が認められた。位置的には、最上段の星より少し下がった位置であることから、笠印付鐶の鐶台下端か根の部分であろうと想定される。

腰巻は、下端をわずかに外に反らし、幅22㎜以上を測る。特徴的な点は、土砂がついて不明瞭な点もあるが、後正中板の射向側において、板の下端が腰巻板に覆い懸かっているように観察され、鉢の地板を矧ぎ、腰巻板を巡らしたあとに後正中板を伏せて製作していたとも考えられる。前面は、裏面において前正中板の裏に腰巻板が12㎜程出ていたことから、腰巻板の上に前正中板を伏していたことがわかる。なお、腰巻板の合わせ位置については、土砂と錆によって不明瞭であるが、前正中板の部分に腰巻の切れた部分があり、前正中板の下で腰巻を留めているとすると、伊興経塚出土鉢と同じ技法になる。

鉢付けの穴は、表面で馬手側に径2㎜程のものが1孔確認できたが、ほかは不明である。また、響穴も不明である。

Ⅳ　奈良・平安時代兜鉢変遷試案

(1)　星兜形成期に関する諸説

大鎧に具す星兜の系譜については、大きく2つの学説が存在する。1つは、星兜の源流を古墳時代の衝角付冑に求めるもので、尾崎元春氏（尾崎編1968）や笹間良彦氏（笹間1987）らの説である。笹間氏は、最古の星兜の事例である旧観音庵蔵品を衝角付冑の衝角部が伏板から中央に穴があき天辺の座の形式へと移行したと捉えている。

一方、山岸素夫氏は（山岸1991）、奈良時代の冑は様による一定の規格を定め諸国に命じて製作させたものであって、私製の武士の甲冑とは異なること、中世の兜鉢は古墳時代の冑とは

直結せず、律令制国家によって製作・規制・管理された兜鉢の様式を反映・継承したと推定している。

中世の兜鉢である星兜の形成時期については、笹間氏は（笹間1987）明確な根拠を提示されていないが、旧観音庵品（現藍住町教育委員会蔵）を10世紀初頭、次いで三春出土の兜鉢を10世紀末、男体山出土兜鉢を三春出土鉢に次ぐ時期、唐沢山神社蔵兜鉢を12世紀中頃に想定している。また、京都国立博物館『日本の甲冑』では（京都国立博物館1989)、旧観音庵蔵品を11世紀、伊興経塚出土兜鉢を11～12世紀、三春出土兜鉢と唐沢山神社蔵兜鉢を12世紀の所産と解説している。さらに、前掲『日本の美術№24甲冑』では、星兜などの甲冑の形制が整ったのは天慶乱ごろ（931）から前九年合戦ごろ（1055）までの間と推定している（尾崎編1968)。また、鈴木敬三氏は（鈴木1979)、安和２年（969）の『西宮記』の用語に『延喜式』にみられない和様の名称があることから鎧が国風化したと想定している。国風化とは、兜を含め大鎧の形成を意味するのであろう。

これらをみてくると、星兜の形成時期に関する年代根拠はほとんどなく、年代観やその系譜についても不確定であることがわかる。

⑵　奈良時代から平安時代の前期・中期星兜鉢の各要素分類と変遷

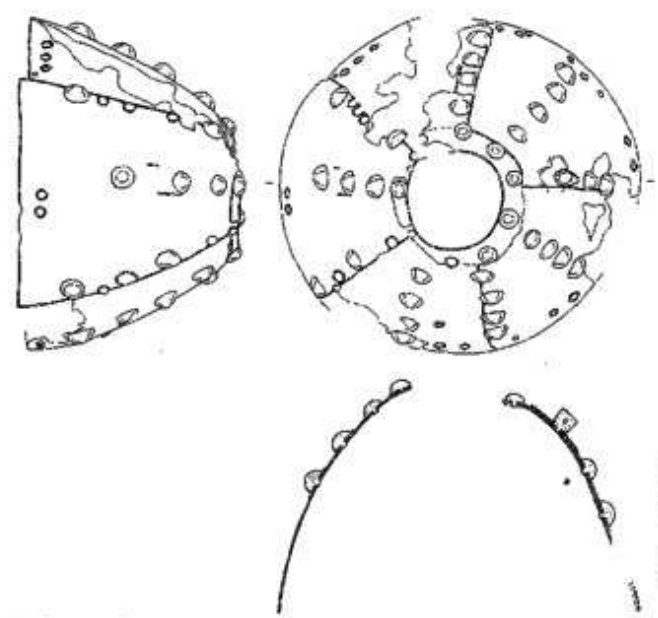
ａ）編年の方法

平安時代の兜鉢の変遷については、山岸氏によって様式論的視点から詳細に論述されている（山岸1991)。資料数の少ない平安時代の兜鉢の変遷を把握するためには、様式論的方法は有効と考えられるが、考古学的方法で検討する場合には、様式論として小林行雄氏、それを発展させた寺沢薫氏の様式の理解に従うのが有効的であろう。つまり、「縦に系列化された形式の各型式組列を各形式相互間の時代性、つまりは同時代的認識を前提とした型式群によってまとめた横のつながりが様式として捉えることのできる実像である。」という方法（寺沢1989)による。

具体的には、兜鉢を構成する部位ごとに―部位は鉢を構成するために各機能を有しており、形式に相当する―分類し、各部位ごとにそれぞれの資料について計測値や特徴を示す。その特徴等の同一または、類縁的であるものを各部位（形式）の型式とし、型式組列を把握する。資料は後補の部分を除けば、各部位は製作時の同時性を示すことから各型式（要素）をまとめたものが様式となる。この手続きを経て山岸氏の様式的方法に接近・対比しうると思われる。

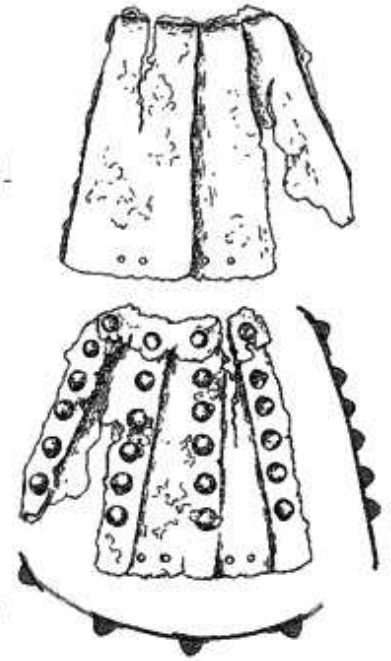
ｂ）奈良・平安時代兜（冑）鉢の分類

ここでは、奈良時代の八幡横穴14号墓出土資料から星兜の初期の遺例について鉢の諸要素を分類する。

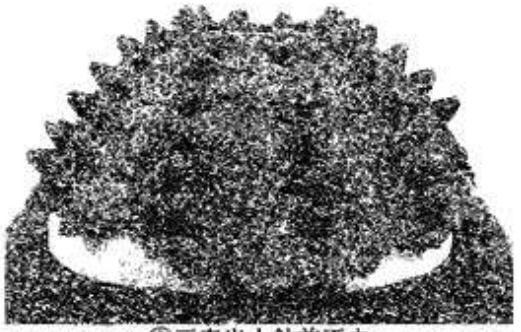


縮小　1／4

①旧観音庵蔵鉢



②日光男体山頂出土鉢



③三春出土鉢前正中

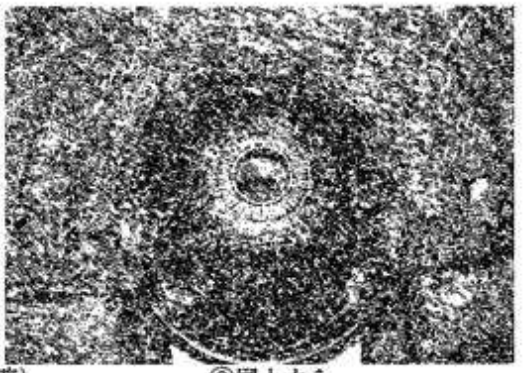
④同射手側

⑤同後正中（東京国立博物館蔵）

⑥伊興経塚出土鉢馬手側（東京国立博物館蔵）

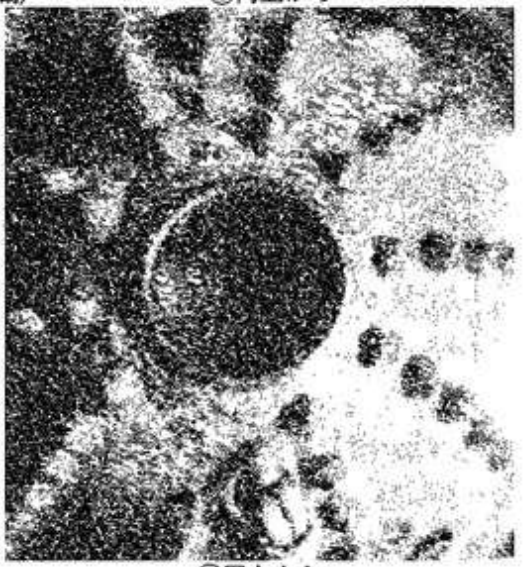
第3図　平安時代兜(1)

①旧赤木家蔵赤韋威鎧兜前正中(岡山県立博物館蔵)



②同上から

③菅田天神社蔵小桜威鎧兜前正中



④同上から

⑤同馬手側

⑥後正中

第4図　平安時代兜(2)

・鉢の大きさ

鉢の前後径では、旧観音庵蔵鉢は17.5cmであるが、伊興経塚出土鉢で18.8センチ、三春出土鉢や北海道大学農学部博物館蔵鉢は21～22cmであって、旧観音庵蔵鉢よりも大きい。これは左右径でも同様の傾向がみられ、旧観音庵蔵鉢では17.0cmであるが、三春出土鉢や北海道大学農学部博物館蔵鉢では20cmに達する。

・矧ぎ板枚数

八幡横穴14号墓鉢は４枚であって、旧観音庵蔵鉢では５枚、三春出土鉢と伊興経塚出土鉢では10枚と増える。北海道大学農学部博物館蔵鉢は13枚であるが、本来14枚矧ぎか12枚矧ぎで１枚矧ぎ足したとみるのが妥当であろう。唐沢山神社蔵鉢は15枚ながら、本来14枚で構成され１枚矧ぎ足したものとみられる。

14枚矧ぎは、前掲山岸氏によれば（山岸1991）、14枚張りの両脇張出式で中世初期兜鉢の規格化したものと言う。

矧ぎ板枚数からみると、八幡横穴14号墓鉢・旧観音庵蔵鉢→三春出土鉢・伊興経塚出土鉢・旧赤木家蔵兜鉢・北海道大学農学部博物館蔵鉢→唐沢山神社蔵鉢と矧ぎ枚数が増えていったと考えられる。

・板金縁

奈良時代の八幡横穴14号墓鉢から大鎧の旧赤木家蔵兜鉢・唐沢山神社蔵鉢まで矧ぎ板の縁に捻り返しによる筋はみられない。筋のみられるのは御嶽山神社蔵兜鉢等である。捻り返しのないものから筋を立てたものへ変化すると考えられる。

・星（無垢星・空星）

八幡横穴14号墓鉢は一般に星と呼べないが、無垢の鋲である。旧観音庵蔵鉢・三春出土鉢・伊興経塚出土鉢・北海道大学農学部博物館蔵鉢・旧赤木家蔵兜鉢では無垢星であって、八幡横穴14号墓鉢と類似する。唐沢山神社蔵鉢は空星であり、他と区分される。一般に言われるように初期星兜では無垢星から空星に変化したとみられる。

・星の高さ

八幡横穴14号墓鉢の鋲は高さ0.2cmであるが、旧観音庵蔵鉢で0.4～0.6cmと変化する。旧赤木家蔵兜鉢・唐沢山神社蔵鉢になって1.0cm前後となり、厳星の名に相応しい大形の星になる。ただし、三春出土鉢は0.9～1.2cmであって、ほかの諸要素に比較して星が高くなっている。

・八幡座（頂辺）

八幡横穴14号墓鉢の頂辺は、現存長で10.5×10.2cm、厚さ1.0cmであって、厚みのある鉄製の伏板であり、頂辺の穴はない。旧観音庵蔵鉢・三春出土鉢は薄い円座を据えている。北海道大学農学部博物館蔵鉢は、土砂が付着するが円座の断面が蒲鉾状をしており、玉縁と判断され

第1表　奈良時代から平安時代の冑（兜）鉢要素分類表・年代試案

要素＼資料名		八幡横穴14号墓鉢	旧観音庵蔵鉢	三春出土鉢	伊興経塚出土鉢	北海道大学鉢	男体山頂出土鉢	旧赤木家蔵鉢	唐沢山神社蔵鉢
大きさ	(前後径)	—	17.5	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
	(左右径)	—	17	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
	(高　さ)	—	12	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]	[illegible]
矧ぎ枚数		4	5	10	10	12 (10?-14)	—	10	[illegible]
板金縁		平	平	平	平	平	平	平	平
星(鋲垢・空)		無垢	無垢	無垢	無垢	無垢	無垢	無垢	[illegible]
星（高さ）		0.2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
八幡座(頂辺)		伏板	円座	円座	[illegible]	玉縁	玉縁座	—	[illegible]
篠　垂		衝角	(なし)	なし	なし	なし	—	[illegible]	[illegible]
腰　巻		なし	なし	[illegible]	[illegible]	[illegible]	(なし)	[illegible]	[illegible]
分　類		1	2a	2b	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
年　代	A案	8世紀	(9世紀以降)		(10世紀後葉以降)			11世紀後半以降	
	B案		(9世紀以降)		(10世紀中葉以降)				

る。男体山頂遺跡出土鉢は鉄製の葵葉座が付く。唐沢山神社蔵鉢は玉縁・小刻座・裏菊座・葵葉座が付き、中世初期兜鉢の規格化したものという（山岸1991）。このように、頂辺の穴のない伏板式の八幡横穴14号墓鉢→頂辺の穴があり、薄い円座や玉縁や葵葉座のみで、唐沢山神社蔵鉢のように4つの座金からなる八幡座の基本組成の揃わない三春出土鉢等→鉄製で一部加飾性が発達する北海道大学農学部博物館蔵鉢・男体山頂遺跡出土鉢→八幡座の基本組成の揃った唐沢山神社蔵鉢と変遷したとみられる。

・篠垂

八幡横穴14号墓鉢は衝角付冑であって、篠垂はない。旧観音庵蔵鉢は現状では明確に観察されないが、前正中板の上から3つ目の星の下に黒漆の筋がみられ、鉄製篠垂の剥離痕の可能性も残る。三春出土鉢・伊興経塚出土鉢に篠垂はないが、伊興経塚出土鉢には前正中板中央の星列に菱形の座金と菊座が付き、加飾化の傾向が認められる。北海道大学農学部博物館蔵鉢には伊興経塚出土鉢と同じく前正中板中央の星列を両側より長くしているが、菊座などは観察されない。菅田天神社蔵兜鉢は篠垂がないが、やはり星列の長さで加飾化を図る。旧赤木家蔵兜鉢・唐沢山神社蔵鉢は、鉄製の篠垂を付ける。このように、衝角の付く八幡横穴14号墓鉢→明確には篠垂の確認できない旧観音庵蔵鉢・三春出土鉢・伊興経塚出土鉢・北海道大学農学部博物館蔵鉢・菅田天神社蔵兜鉢→鉄製篠垂のある旧赤木家蔵兜鉢・唐沢山神社蔵鉢と変遷したと

みられる。

・腰巻

八幡横穴14号墓鉢と旧観音庵蔵鉢には、腰巻板がない。男体山頂遺跡出土鉢も腰巻板がない可能性がある。伊興経塚出土鉢・北海道大学農学部博物館蔵鉢では正中板が腰巻板の上から伏せ留める技法である。三春出土鉢・旧赤木家蔵兜鉢・唐沢山神社蔵鉢は、正中板の上を腰巻板が覆い留める技法である。技法的には、腰巻板なし→腰巻板があって、正中板が腰巻板を覆い留める技法→腰巻板が正中板を覆い留める技法へ変遷したとみられる。

・類型化（様式分類）

これまで各部位の型式的な分類を行なってきたので、資料数が少ないが、これらをまとめて様式的分類を行ないたい。なお、ここでの様式的な変遷は、大鎧の兜鉢の通時的な様式変遷を視野にするものではなく、小稿での便宜的なものであることを付記しておく。

1様式は、矧ぎ板枚数が4枚と少なく、頂辺は伏板式で、前正中は衝角の付く冑で、古墳時代以来の衝角付冑と呼ばれるものである。八幡横穴14号墓出土鉢がこれに属する。

2様式は、各部位の型式のまとまりに統一性を欠くが、3様式を構成する型式群に統一性があり、3様式に至る揺籃期として、これを実態として理解し、a・bと小区分して理解することが妥当であろう。1様式とは前正中の衝角が消え、星が打たれたことで大きく区分され、星兜の初源例である。頂辺に穴があき1様式と区分されるが、玉縁や蓑葉座がなく、装飾性の未発達の点で区分される。旧観音庵蔵鉢と三春出土鉢がこれに属する。

3様式は、伊興経塚出土鉢・北海道大学農学部博物館蔵鉢・男体山頂遺跡出土鉢でまとまった特徴を示す。特に、伊興経塚出土鉢と北海道大学農学部博物館蔵鉢は大きさ・星の形状・腰巻板と正中板の伏せ留め方等に共通性が多い。2様式・4様式とは八幡座の装飾性、及び腰巻板と正中板の伏せ留め方で相違が認められる。北海道大学農学部博物館蔵鉢は、14枚矧ぎであるとすると基本構造で4様式に近くなる可能性もあるが、加飾性の発達の点で4様式と区分される。

4様式は、中世兜鉢の諸要素が概ね満たされるもので、定型化した矧ぎ板枚数と無垢星・空星の差異でa・bと小区分した。旧赤木家蔵兜鉢と唐沢山神社蔵鉢がこれに属する。

c）年代の付与

平安時代の甲冑の年代判定方法については、有職故実の方面から絵巻物の描写等と対比しながら行なわれてきた（鈴木1989）。筆者は考古学的な方法で遺跡から出土する小札の変遷を把握することによって、平安時代の大鎧の年代的位置付けを行なった（津野1998）。小札の各要素を分割し、要素の組成をもとに小札の変遷を想定し、遺跡で年代の定点となるものを選び、この変遷過程に年代を与えた。この結果は、大鎧の様式編年を組み立てられた山岸氏の平安時

代兜の変遷観（山岸1991）とも多くの部分で一致しており、大過ないものと思う。今回も考古学で一般に用いられる要素（型式）の組成に基づく様式と土器論等で用いられる年代付与の方法によって鉢の年代を推定する。

現在の資料での年代は、奈良時代については八幡横穴14号墓の小札甲が、８世紀中葉で特に第３四半期を中心とした年代が与えられ、小稿での１様式（４枚の広板縦矧衝角付冑）の年代的な基準となる。平安時代後半の大鎧については、旧赤木家蔵（現岡山県立博物館蔵）赤韋威大鎧・唐沢山神社蔵大鎧が、青森県古館遺跡の年代と小札型式、さらに京都府法住寺殿跡出土大鎧の埋納時期と小札型式などから、11世紀後半以降と位置付けられた。この２点が星兜形成時期の前後に位置付けられる年代基準である。

この間の様式については、２つの様式で小区分を含めれば３時期となる。極めて限られた資料であるが、１様式と４様式の間について、小区分を含め３時期とした場合（A案）と２様式であることから２時期とした場合（B案）を試案として提示したい。ただし、八幡横穴14号墓の鉢は共伴する小札が８世紀中葉でも第３四半期を中心とするものであることから、衝角付冑の終末に幅を考慮し、２・３様式を９世紀から11世紀前半と推定したい。そして、考古学での土器・陶器での年代付与方法等を参照し（斎藤1987）、各様式にもたせる時間幅の根拠がないことから、概ね均等に割って年代を与えれば、A案では１様式が８世紀、２様式が９世紀以降、３様式が10世紀後葉頃以降、４様式が11世紀後半以降となる。B案では１・４様式の年代観は同じであるが、２様式が９世紀以降、３様式が10世紀中葉頃以降となる。各兜鉢はこの時間幅の中に位置付けられるものと思われる。勿論、年代の明らかな資料の増加により星兜の初源時期も下る可能性がある。

V　おわりに

小稿では資料の少なかった平安時代の兜鉢の資料紹介と平安時代前期・中期の鉢の変遷と年代の付与を試みた。もとより資料も少なく、年代の根拠が限られ、年代観も一致をみない甲冑について、新たに考古学的方法で年代の付与を行なった。その結果、変遷については山岸氏の見解に概ね沿うものであり、これに考古学的方法によって年代を与える作業となった。しかし、この年代推定も資料が少なく試案の域を出るものではなく、資料の増加・方法論の開拓によって克服されるものと思う。また、今後は衝角付冑から星兜という冑（兜）の様式変化の背景についても考究して行く必要がある。

最後になりましたが、小稿を作成するにあたり、次の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。池田　宏・加藤　克・小杉　康・下田太郎・初山孝行・藍住町教育委員会・岡山県立博物館・菅田天神社・東京国立博物館（敬称略）

参考文献

臼井洋輔　1988「赤韋威大鎧の研究」『岡山県立博物館研究報告』第9号

尾崎元春編　1968『日本の美術　第24号　甲冑』　至文堂

京都国立博物館　1989『日本の甲冑』

斎藤孝正　1987「施釉陶器年代論」『論叢・学説日本の考古学　6歴史時代』　雄山閣

笹間良彦　1987『日本甲冑大鑑』　五月書房

鈴木敬三　1979「甲冑写生図集解説」『甲冑写生図集　中村春泥遺稿』　吉川弘文館

鈴木敬三　1989「絵巻物にみる甲冑」『日本の甲冑』　京都国立博物館

津野　仁　1997「西ノ谷遺跡の小札」『西ノ谷遺跡』　財団法人　横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会

津野　仁　1998「古代小札甲の特徴」『特別展　兵の時代—古代末期の東国社会—』　横浜市歴史博物館・財団法人　横浜市ふるさと歴史財団

津野　仁　2000「八幡横穴14号墓の甲冑」『福島考古』41号

寺沢　薫　1980「大和における第五様式の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所

寺沢　薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』　奈良県立橿原考古学研究所

寺沢　薫　1989「様式と編年のありかた」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』　木耳社

日光二荒山神社　1963『日光男体山　山頂遺跡発掘調査報告書』　角川書店

山岸素夫・宮崎眞澄　1990『日本甲冑の基礎知識』　雄山閣

山岸素夫　1991『日本甲冑論集』　つくばね舎

山岸素夫　1994『日本甲冑の実証的研究』　つくばね舎

山岸素夫・斎藤慎一　1997「国宝　赤糸威鎧の調査・考察」『武蔵御嶽神社蔵　国宝赤糸威鎧』　青梅市教育委員会

挿図出典

第1図　筆者作図

第2図　筆者撮影

第3図　①筆者作図　②日光二荒山神社1963　③～⑥東京国立博物館提供・掲載許可済

第4図　①・②筆者撮影（岡山県立博物館掲載許可済）　③～⑥菅田天神社提供・掲載許可済